

夏目漱石と小説の「植民地」

—「彼岸過迄」を中心に—

大坪利彦

一、小説空間の〈裂け目〉

近代の小説家のなかで佐藤春夫は台湾通の作家と見做されていることは周知の事実である。⁽¹⁾ その場合「台湾通」とはどのようなことを指してそう認められ、またそこで問題にされている「台湾」の内実とは何だろうか。まず、佐藤春夫には「台湾」を題材とした小説は言うまでもなく随筆・小品・紀行文さらには童話のような児童向けの読み物まで含めるなら十篇ほどにもものぼる作品の書かれていることが挙げられる。⁽²⁾ しかも、大正後期から昭和十年前後にかけておよそ十年余の長期間にわたり継続的に執筆・発表されているという特性をもっており、つまり日本帝国主義時代の植民統治下における「台湾」への同化政策に関する史の変遷、たとえば先住民族の長期にわたる抵抗にみられる植民地ナショナリズムのあり様を併置させながら、根気強く親和的に作品が書かれているという事実にもとづいて件の「台湾通」という評価の行われているとみる事が出来る。

とりわけ重要な点は、そうした「台湾もの」と呼ばれる作品群を書く契機を佐藤春夫にもたらした台湾旅行（大正9年7月6日-10月15日）のおよそ三ヶ月半の期間を通して、当時の台湾総督府下村宏（海南）総務長官⁽³⁾の内地人招致の趣意から佐藤春夫に対してきわめて厚遇の便宜や保護が与えられることになり、それは河野龍也氏の言うように「私人として偶然台湾を訪れた春夫を総督府の賓客なみに扱い、人気作家の文筆による宣伝効果を狙った」⁽⁴⁾とみられる文化戦略的な統治政策上の意図や期待のかけられていたことと深い関係をもっていると考えられる。その点については、藤井省三氏も「明治四三年（一九一〇）に朝鮮の植民地支配が始まり、日本の北進政策が力を振るい始めるにつれ、植民地台湾の存在感はややもすれば霞がちでもあった。この行き詰まり感を打破し、内地資本のいっそうの誘致を図るべく、下村長官は“宣伝”を意図していたのである。（中略）下村の談話に出てくる映画とともに、いやそれ以上に“宣伝”効果が期待されたのが文学であった。」⁽⁵⁾と指摘しており、台湾旅行時における佐藤春夫の公私両面を交錯するような微妙な立場についてある程度理解出来るであろう。河野氏は先の引用に続けて、「ところが、この期待は裏目に出る。春夫は内台同化が飽くまで統治者のタテマエに過ぎぬことを『台湾もの』の中で繰り返し描いた」⁽⁶⁾のであると指摘する。この佐藤春夫の反権力反体制的ヒューマンイズムの由来や根拠についての検討の機会とは別稿に委ねることとして、ここでは近代の小説家がこのように日本の「外地」としての植民地をその文学的表現の「内部」に包摂することの自然性や必然性さらには両義性（ダブル・バインド）について確認しておきたいと思われる。

そのことは、たとえば川村湊氏が、埴谷雄高について「ぼくは台湾で育つたんです。台湾は植民地としては豊かな土地でした。だけど、朝鮮でもそうだったと思いますけれど、植民地で育つた人たち

は、なんといつでも、精神の二重構造を持つようになる。日本人は、その当時は十万人ぐらいしかいなかったらと思うんですが、約七、八百万の本島人に対して絶対支配的な立場に立っていた。それが子供の眼にも、ときどき、破れて見える。(中略)ひどい男は人力車に乗って、車夫の頭を後から蹴る。そういう時に子供のおさない心も二つに破れざるを得ない。まだ、子供ですから、植民地の位置については格別わからないですが、人間のやりきれない抑えた表情に胸を破られる。やたらにいばつていっている日本人に屈服して、いやいやながら従っている人間が別にいるということがぼんやりした棘となつてわかる。そのわかりかたをどう深めるかはその後の問題だけれども、どんな子供でも植民地で育てば、そういう二つの裂けた感じをたえずもつわけですね。』¹⁷⁾ という植谷の自伝的文章を引用して、植民地台湾の社会を閉塞している憂鬱の蔓延状態について、「彼は自分が生まれ、育った台湾という地で感じた『裂け目』について語っている。その言説はやや整除され過ぎているような気がしないでもないが、植民地で育った少年の精神形成の一つの有り様を示しているものと考えられる。子供というものはモラリッシュなものだ。それは家庭内でも社会においても、自分が弱者であることを経験的に知っているからだ。彼は弱者の立場から、被植民者という社会的な弱者を見ているのである。』¹⁸⁾ と的確に述べていることと呼応してきわめて重要な視点が提出されており、そうした視点を日本語表現のなかに包摂した文学作品が少なからず生み出されているという事実を、国家の近代化つまり近代国民国家の形成過程と対応させて考えていかざるを得ない表現の近代化の問題の一つとして、当時の時代状況によって統合された意識や想像力の編成のあり方および日本語表現として配置されたリアリティの内容的価値について検討していく必要があると思われるところから、小論を始めたいと考えている。

二. 小説の内外における「植民地」共同体

ベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』¹⁹⁾ で指摘されている小説の発生論についての思考を受けて、大澤真幸氏は「アンダーソンは、『小説』という様式が、〈ネーション〉の成立とほぼ相即して誕生したという点に注目している。〈ネーション〉と小説が常にほぼ同時に登場してくるのは、〈ネーション〉という共同性を可能にする態度と、小説の文体を可能にする態度とが、同一のものだからである。』¹⁰⁾ として考察を加えている。小説の誕生は、一九世紀以降のヨーロッパ史における国民国家として成立する「ネーション」と呼称される新しい概念による共同体の成長・形成過程とともに進展がなされたとみられていて、「ネーション」以前の自然発生的に成長した共同体(エスニック集団)における説話や物語形式とは異質な表現テキストとして現れたのが小説であると定義づけられ、その両者には、時間・空間の扱い方の相違とそれが不可避的に帰結する「文体」において決定的な相違が認められると結論づけられている。それは大澤氏の指摘するように、「小説とそれ以前の文学との文体の相違は、〈ネーション〉とそれに先立つ共同体が、それぞれのメンバーに対して異なった形式で現れている、という事実を反映している。〈ネーション〉以前の段階においては、社会的な体験は、各メンバーに対して、彼を中心とする直接的な対面関係のネットワークとして現れていたと考えられる。共同性は、各メンバーの身体を視点とする遠近法の形式の中でのみ与えられており、物語の技法は、このような形式の社会関係を反映していると考えられるのだ。それに対して、〈ネーション〉は、その内部でどの視点も特権的ではないような、均質で統一的な全体として体験される。一億人が日本人同胞として体験されるためには、その共同性が、直接

の対面関係とはまったく独立したものとして与えられていなくてはならない。要するに、〈ネーション〉の統一性を感覚するためには、それを構成する各メンバーが、小説の読者の視点に比しうる、外的な超越的視点を獲得していなくてはならないのだ。⁽¹¹⁾と述べて、近代国民国家を規定するネーションに帰属する個々人が「想像の共同体」としてネーションを意識する（感覚する）そのあり様が、「小説」の読者の小説空間を受容し、均質で平準化された統一的な全体として感覚するあり様と相同関係にあるということにおいて結びつけて論じられている。そのような小説の均質空間を可能にする「文体」が、まさに作品内部における「超越的視点」の成立・獲得の有無に関係しており、そうした作品に内包する想像され想定される「読者」を創出していく「文体」によって動機づけられ記述されたテキストこそが、小説に他ならないという捉え方なのである。そのとき、従来の共同体つまりムラ的な集合として一定の地域的広がり限定され、直接経験を基本とするコミュニケーション関係において保証されていた共同体における同一性の維持存続、要するにエスニック・アイデンティティとして共有される物語性や歴史性に基づくエクリチュールが相対化されることになるわけだが、本来そうした作品とは、どのようなものを指してそのように同定されてきたのかと問うなら、明らかに被抑圧的な要するに被植地的なエクリチュールとして差異化されていることに気づかされるのではないだろうか。大澤氏の「一般に、アジアやアフリカ等の植民地のナショナリズムは、列強たる宗主国からの解放と独立の運動を引き起こす。だが、植民地化されていた人々の〈ネーション〉としての自覚は、まさに彼らが脱却しようとしている状態にこそ、すなわち帝国主義者によって支配されていたという事実こそ依存して、形成されたのである。旧植民地のナショナリズムが、まさに彼らを抑圧してきた他国の公用語によって自己を表現するという屈折が意味しているのは、このことである。アンダーソンは、植民地化された人々の国民的な感情の表出において、常にはないにせよしばしば、彼らが憎んでしかるべき帝国主義支配者に対する憎しみの要素が、驚くほどわずかであった、という点を指摘している。このことは、〈ネーション〉が、帝国主義的支配に対して有する依存関係によって、説明できる⁽¹²⁾」という論は個別的な事例ではなく、普遍化された帝国と植民地との関係性への言及なのである。

ところで、小説とは、「ネーション」という社会制度的な概念によって人工的に産み出された集団を形成していくための言語・歴史・文化・習慣等の内的統合性の強められた共同体（ネーション・ステート）における均質性・共同性と不可分なものであり、その意味でエスニック集団のように第一義的な同質性を、地縁・血縁のように生物的な自然化された結合に求める共同体とは異質な関係性に立つ存在と見られていて、行政的にも経済的にも文化的にも差異化されてきたその成立過程と深く関係をもっていると考えられているわけだが、実はそれほど截然と差異化されるものではないことが分かっている。

さて、今日「国民作家」としてゆるぎない地歩を固めているとみなされる夏目漱石の文学作品のなかに、後発の植民地帝国ではあったが、一九世紀末から植民地の所有が開始されやがて二〇世紀に至って本格的な経営拡大の進捗の図られた「外地」としての植民地において平準化され同化させられた共同性を想像させるような小説、それは「内地」としての日本国内の均質化・平準化をモデルとして、つまり植民地帝国日本の支配被支配関係を配置させられて展開していくような小説の数多く存在することはよく指摘されることである。

小森陽一氏は「帝国主義的植民主義の支配と被支配の関係、そこに発生する人種主義的差別と、

戦争という暴力の問題は、小説家夏目漱石の誕生以降、一貫した主題系としてあらわれている。」¹³⁷と指摘し、漱石名義の最初の小説『吾輩は猫である』（明治38年1月-39年8月）は、作品に内在している「圧倒的な軍事力と経済力によって、支配する側が支配される側に対して、一方的な生殺与奪の権までも握ってしまう、いわゆる『大航海時代』以後の、植民地主義の暴力の生々しさ」¹⁴⁰というプロブレマティックを、「人間」と「猫族」との種族間における支配被支配関係に置き換えることでアレゴリカルに描かれた小説と論じている。また、押野武志氏は「彼岸過迄」について「敬太郎のロマンティックな物語を欲する感性は、不特定多数の読者と共有しうるような共同性を持つという点が重要で」、「それは、日露戦争後の極めて歴史的なものであり、それをここでは植民地主義的想像力と呼びたい」¹⁴⁵と述べていて、きわめて重要な視点を提示している。ここで提出されている「不特定多数の読者と共有しうるような共同性」こそ、まさに想像され得る共同体（ネーション）における「外的な超越的視点」に立つ「共同性」のことを指す概念であり、その意味で漱石の小説は、こうした作品に内包された感性を共有することのできる「読者」（＝超越的視点）を獲得した小説という意味において、「国民文学」であったことを理解できるという捉え方なのである。

それは、朴裕河氏が指摘するように「漱石は政治的には帝国主義的な態度を否定した。しかし、彼はこの時期に浸透した帝国主義的な『感受性』を明らかに共有している。それは個人的なものではなく、歴史的に制度的に形成されたものだ。そして、文学が何よりも感受性のレベルにおいて成立するのだとしたら、漱石における帝国主義への共鳴は、彼自身がほとんど自覚していないようなレベルにおいて見られるべきである。」¹⁴⁶と述べていることとも共通した捉え方なのであろう。

このように、後発であった植民地帝国「日本」における日露戦争の勝利を受けての「一等国」という共同幻想¹⁴⁷に端的にみられるような大衆意識を生み出した高揚感を反映する意思的な近代文学のエクリチュールを検討してみるなら、夏目漱石の作品においても「小説の植民地」とでも言うべき差異化や差別化による〈裂け目〉（二重構造）の内包された小説が数多く存在しているとみられ、そうした読み方を許容することの可能性について気づかされる。前述した押野氏の指摘する「植民地主義的想像力」を媒介として「現実の政治とは無縁と思われる個人的な感性のなかに、当時の国民国家的な感性と共鳴するものがある」と見做し、さらに「漱石が国民作家たるゆえんは、文壇ではなく、多数の国民に向けて書き、支持されたというばかりではなく、国民国家の共同性を感性的に支えたところに求められる」¹⁴⁸という示唆的な視点の提示によって漱石文学を読み換え捉え直していくことには意味があると思われる。

同様に、小森氏も「『彼岸過迄』の田川敬太郎は、『門』の宗助に比べても、よりいっそう植民地主義的な日常感覚にとりこまれている。」¹⁴⁹と述べているように、「彼岸過迄」という小説に関しては「植民地文学」という観点から論を進めていくことの蓋然性や可能性が確かめられるのではないだろうか。ここで言われている「植民地主義的な日常感覚」というものの正体が、植民者としての暴力的な感性の向かう対象が、被植民者という社会的弱者にステレオタイプ化されているだけではなく、重層化した関係性として差別につながる差異化を偏在的に生み出していること、つまり日常化していることを問題にしていかなければならない筈である。社会的弱者における〈裂け目〉と見られるものが遍在しており、二重構造（ダブル・バインド）として小説のなかに異和空間を作り出している。

ところで、小説「彼岸過迄」は、明治45年（1912）1月2日から4月29日まで全118回にわたり「東京朝日」および「大阪朝日」両紙に掲載された新聞小説として発表され¹⁵⁰、連載前日の同年1月

1日には連載予告文として「彼岸過迄に就て」が両紙に公表されている。そこに「東京大阪を通じて計算すると、吾朝日新聞の購読者は実に何十万といふ多数に上つてゐる。其の内で自分の作物を読んでくれる人は何人あるか知らないが、其の何人かの大部分は恐らく文壇の裏通りも露路も覗いた経験はあるまい。全くただの人間として大自然の空気を真率に呼吸しつゝ、穩当に生息してゐる丈だらうと思ふ。自分は是等の教育ある且尋常なる士人の前にわが作物を公にし得る自分を幸福と信じてゐる。」⁽²¹⁾と述べている。前述の「国民国家の共同性を感性的に支えた」（押野氏前掲論文）という漱石作品の「読者」として内包されている「是等の教育ある且尋常なる士人」へ向けて作者漱石の共感を求める言説が届けられ、想像されそれゆえ動機づけられることで、「吾朝日新聞の購読者」へ焦点化して書かれていくことになる。

この小説は、同時代のラディカルな現実を反映させた実体としての歴史性を「配置」するかたちで書き進められており、そのことは小森氏や柴田勝二氏のまさに指摘するとおりである。柴田氏は、「長年夏目漱石の作品を愛読しながら、その世界を読み解くには何らかの〈補助線〉が必要ではないかと感じてきた。漱石の作品はリアリズムを基調としながら、どの作品にもそれに逆行する要素がはさまれ、それがその世界に不透明さをもたらしているように思われたからである。（中略）そして主要な作品を読み進むうちに、その補助線が浮かび上がってきたが、それは単純なもので、作品内の人間関係に、同時代の日本をめぐる国際情勢の文脈を挿入することで、不透明さを含んだ表象の多くが説明できることが分かった。」⁽²²⁾と述べている。

「彼岸過迄」の主要な「場面」は国民国家日本の首都東京に焦点化しながら、その外部（外縁）である植民地空間を配置していくことで重層化し、「内地」（ネーション）の近代都市と植民地という近代以前と想定される「地域」（エスニシティ）との明白な差別構造を抱え込んだことによる人びとの意識のなかにある種の乗り越えがたい対象、解消されがたい心的状況（裂け目）を描き出していると考えられるものである。ここで近代主義（異文化交流）という〈越境〉行為（グローバリゼーション）が「同化」政策という文化的統合化が遂行されようとするわけだが、その意思のなかにはけっして〈越境〉を果たせない対象として予め想定された要素が含まれており、こうした多次元的な差異を〈平準化・均質化〉できるものとはみなしていないことを確認しておかなければならない。そうした越えられない〈格差・偏差〉のリアルな実体を、漱石が小説言説のなかにストラテジックに敢えて持ち込んでいるという事実は、漱石の小説がきわめて意識的に差異化や差別化に対して開かれていたことを証明することにもつながり、漱石における近代国民国家に対する文明論的な批評になっているとも受け取れる言説編成なのである。

もちろん、前述の朴氏の視点からするなら、「漱石は日本の植民地での『活動』を『文明』の移植と考えていた。しかし、『文明』の移植（汚れ、迷信、立ち後れた文明的設備など）こそ、実は帝国主義の表向きの顔だったこと（中略）いうならば、漱石は帝国主義を、『文明』の名において許してしまったのである。」⁽²³⁾と論じていることを併せて検討していかなければならない問題機制を有している。

また、山室信一氏の言うように、「マルクス主義を含めて進歩史観や文明史観などの発展段階説を基底に構成されてきた人文・社会諸科学は、空間的な『ヨーロッパの彼方』を時間的な『ヨーロッパの昔日』へと置き換え、それによってヨーロッパやアジア、アフリカといった空間的差異をいったん解消し、ただ一つのスペクトラムのなかに配列し直す人類史像を提供した。それは地域的・空間的な

事物の差異を時間的差異に置き換えることによって、地球上に存在する異なった文化や習俗の差異を統一的な基軸によって認識するという課題に答えてきた」²⁴⁾ という同時代的な世界システムの構築が、日本社会においても次第に実行され浸透されつつあったことと関連している。あるいは、前述したように文化的〈越境〉という行為は、絶対に越境できないという意識があってこそ志向されるものとも考えられ、しかもそこには当初からの挫折を含みこんでいるもので、未遂に終焉してしまうような矛盾にみちた意識と行為とが〈越境〉なのであるという見方もできるものと思われる。こうした論点を殊更問題にしているのは、後発の植民地帝国として東アジアで最強国（アジアの憲兵国）となった日本が、その獲得・編入した植民地に対して行われる「同化」政策、つまり「日本化」や「日本人化」を目的とする文化的統合政策は、至極当然の成行きとして、何をもって「日本」とし、「日本人」と見做すのかという「帝国イデオロギー」に関する論理的整合性を必然的な前提としているということを確認したいためなのである。

ところが、石田雄氏は、「かりに帝国イデオロギーの法的表現を大日本帝国憲法に見出すとすれば、この憲法で保証された参政権が北海道の住民によって行使されたのは、一九〇四（明三七）年旭川師団が日露戦争に動員された年、すなわち『新領土』台湾で『同化』政策が行われはじめてから約十年の後である。また沖縄の住民にはじめて参政権行使の機会が与えられたのは『日韓併合』（一九一〇）の二年後である（宮古、八重山はさらに七年おくれた）。以上の事実からみて、日本帝国の公定イデオロギーの確立が『同化』政策の前提であったという考え方には疑問の余地がある。」²⁵⁾ としている。国内植民地としての処断や処分を受けていた北海道や沖縄を「外地」の植民地に対して、学習された前例としてスライドし、台湾や朝鮮における植民地政策をとりわけ内地延長主義にもとづく「同化」政策を強行していく端緒を開いたと従来考えられている見解は、必要十分な論理的整合性ある説明とは至らないというのがどうやら実情のようである。

ここにはやはり誤謬があり、日本国内の公定イデオロギーと植民地における「同化」政策との間には、時系列的な順序性を追究することよりも、きわめて密接な相互関連性の存在していることこそ問題にすべき事柄なのであるという点である。その点についても、石田氏は「極端な事例としては『同化』政策が『日本』の中心的価値に影響した場合もある。植民地における『皇民化』政策が戦時体制期における『同化』政策の特徴としてあげられるが、実は『皇国』という用語が法令の中で用いられ始めるのは植民地の方が先である。（略）同じように宮城遥拝のような儀式の一般化も周辺あるいは植民地が先であると思われる。」²⁶⁾ と述べており、さらに「『同化』政策は『日本』的価値を論理的に前提するのではないかと述べたが、実は逆の場合もありうる。すなわち『同化』させるべき目標としての『日本』の価値を明らかにしなければならないという要請が、その価値内容に影響する面があるからである。異なった文化との接触によって自己の文化の特質を自覚化し、異文化を持つ人たちを包摂するために、あるいは彼らに志向すべき目標を示すために、自分たちの価値を確定し、あるいは修正するという企が現実にもられる」²⁷⁾ と石田氏は論じている。このように文化的〈越境〉の両義性について問題にするのは、こうした観点からなのであろう。植民者と被植民者という二分法によるステレオタイプな序列の関係だけでは決して説明され尽せない価値概念の相互媒介性が、この支配被支配の関係において現象的にみられることは明白な事実であると考えられる。

日本帝国と植民地との関係における歴史的事実としての「国際情勢の文脈」、つまり小説の外側にあるコンテクストを漱石の小説の内部には、〈裂け目〉として抱え込んでいるのである。その〈裂け

目)とは、石田氏の論にあるように日本帝国とその植民地との相互媒介的に生み出されるものであり、相互に影響し合うような歴史的状況下にあったということについて真摯に思考をめぐらしていかなければならない問題であると思われる。

三. 世の中への〈出口〉

漱石は小説に緩急の差を生み出すことの巧みな小説家だと感じるのは、いつもこうした小説の冒頭の部分をそろそろと読み始めたときである。「彼岸過迄」の第一章「風呂の後」もそうしたすぐれて独立した「短編」のように読めるのは、やはり漱石のきわめて細心な意思の力と大胆な意匠との戦術のなせる業なのではないだろうか。

「風呂の後」は下宿の下女に「まあ田川さん」と固有名と呼ばれる場面から始まる。「本当にまあ」と、敬太郎は下女から窘められているのだが、この7月に大学を卒業した敬太郎の遅まきながらの「運動と奔走」が個人の努力や営みとは別の次元で空転してしまって、「思う事が引つ懸つたなり居据つて動かなかつたり、又は引つ懸らうとして手を出す途端にすぼりと外れたり」³²⁶ という手触りのない「触感」の表現に象徴されるような無力感から自分ひとりの力の限界性を感じて、飲みたくもない麦酒をわざとポンポン抜いて真っ赤な顔で下宿部屋を乱雑にしたためである。ここで「ポンポン」とか「ポンポン」(時計の大きな音)というオノマトペは、敬太郎にとって退治したい(不機嫌な音)として「風呂の後」の章では日常性を破るような効果音として使われている。なぜなら、敬太郎はまったく「飲めない口」なのである。敬太郎は「卒業して以来足を楯木のようにして世の中への出口を探して歩いてゐる」³²⁷ 毎日なのであった。

柴田勝二氏の言うように、「彼岸過迄」は「中心的な人物が展開の冒頭から姿を現さない」³²⁸ 小説である。しかし、それだからこそ、この作品全体の基盤となっている東アジアと日本との緊張関係や社会背景そして同時代の歴史性などが、用意周到に準備されているように感じられる。もちろんそれは、この小説を購読している「朝日新聞」の読者に対しての用意周到さであり、この作品に内包されている「超越的視点」として作品の〈語り手〉と、さらに国民国家のような「国民」とも相同関係を保っている「読者」に対してのことに他ならない。敬太郎の希求する「世の中への出口」についての〈口〉とは、出口でもあるとともに入口でもある、つまり〈口〉とは「境界性」のことを指しており、それは前作の「門」(明治43年3月1日-6月12日)においても象徴的な「境界性」として用いられているように、その前面でいつまでも無為に佇立してなかなか飛躍できない「場所」として存在しているものの喩えである。

「彼岸過迄」における「彼岸」と「此岸」ということを考え併せるなら、やはりこの〈岸〉や〈端=橋〉などの「境界性」のある場所や前出の「思う事が引つ懸つたなり居据つて動かなかつたり、又は引つ懸らうとして手を出す途端にすぼりと外れたり」という感覚性そのものが、この小説内部に生み出してしまふ〈裂け目〉(二重構造)として差異化されている、〈それから〉という現実世界の順序性が停止させられてしまっている状態と考えられる。大学の同級生たちから「田川の蝟狩」と揶揄されるくらい新聞紙上の冒険譚を「現実」における〈それから〉として等価してしまうような夢想癖の強い敬太郎は、一方で須永市蔵という「世の中の出口か入口か」(=出生)の時点から秘密という宿命のなつまり後天的な努力によっては回復も解消もされ得ない「現実」に閉塞した人物と親交を結んでいる。

東京出身の須永は、生活上においては世の中へ出る必要を感じることはない、つまり経済的・物質的に恵まれている反面、心的に偏狭な孤独な存在であり、地方出身者の敬太郎とは立場を異にしながら、その孤独あるいは独身者ゆえに通じ合う倚る辺なさを持っているという点で価値観を共有している部分もあるということが出来る。敬太郎と須永との友人関係が成立するための内的必然性は、外形上の懸隔とは表裏して両者をどこかしらで帰一させるもの（裂け目）を感じ感応し合う瞬間があるからなのかも知れないが、よく分からない。「遺伝的に平凡を忌む浪漫趣味の青年」³¹⁾と看做されている敬太郎は、やはり須永市蔵のなかにも「平凡ならざるもの」を看取するからであろうか。あるいは須永の〈裂け目〉に被抑圧的な差別につながる差異化を感じるからであろうか。

そこに、もうひとり孤独な人物が敬太郎の周辺に存在していることに気づく。「風呂の後」で印象的に登場し失踪する「情報」を媒介する森本にはかならない。森本とは、どのような人物なのだろうか。森本は敬太郎に比べてはるかに世の中への〈出口〉を模索し続けてきた結果、その差別につながる差異化を感じて生きてきた人物なのである。敬太郎と森本との接点は下宿仲間であることに尽きているわけだが、一つ家に暮らしているという事実からある種の階層的共通性をもっているとみることが出来なくもないと思われる。

周知のように、この二人はなぜ下宿に住んでいるのかと考えるなら、それは二人とも東京に自宅をもっていないためである。そのことは、たとえば石原千秋氏の指摘する「家制度のもとでは、長男としてあるということは、戸主か推定家督相続人であることを意味する。家族は、推定家督相続人の順位として序列化されていた。だが、戸主は単に序列の頂点に位置するだけではない。国家に対して国民という主体になれるのは、戸主だけに許された特権だったのだ。家族は、国民という客体になれるだけである。誤解を恐れずに言えば、長男は、家の中では生まれながらにして貴種だったのである。」³²⁾という家族国家制度にその淵源をみるものであり、その意味で「家族」を単位として成立している明治国家のあり様からするなら、まさに「それから」（明治42年6月27日－10月14日 全110回）の長井代助と同様に〈スベア的人物〉像「代わりとなる二番手の男子」（代助）であることに他ならないようである。但し、敬太郎は「太郎」であることから長男であると想定されるわけだが、森本にシンパシーを必要以上に感じることもから家族主義的な観念から解放された存在として位置づけられているように考えて差し支えないのではないだろうか。もちろん、その人物造型にも何らかの形で当時の時代状況の片鱗を反映していることには変わりがないことと思われる。

さて、ここで問題となる点は、明治国家の社会制度が「国民化」を推進していくための装置として閉塞感を与えるほど強権的につまり社会的誘因（インセンティブ）として抑圧させられたとしても、それは個人的誘因との偏差によって生じる〈口・岸・端〉などの「間」を生じて、さらに内面化していくのではないかということである。あたかも森本の洋杖を「貴方は自分の様な又他人の様な、長い様な又短かい様な、出る様な又入る様なものを持って居らつしやる」³³⁾と暗示を受けたことにより、選択を迫られる出来事や現象との立ち会い方とその意味の見出し方を自得することへとつながって、前述からの〈裂け目〉の問題について、さらに次章で考察してみたい。

四. 理解の〈彼岸〉

愛する者の死は受け容れがたい。ここでの宵子の急逝は、生死の「境界性」の稀薄さ曖昧さをリアリティに描写することを通して、社会における〈子ども〉という存在の移ろいやすさを描いて

いて印象深い連作的な「短編」であるわけだが、「雨の降る日」の章の挿入は、小説「彼岸過迄」全体のなかでどのような意味をもっているのだろうか。この松本家の末子（五番目）で数え二歳になる女の子の不得要領の死は、目前で起きた出来事でありながら生の側（此岸）に留まるものには決して手の届かない、また理解の訪れようのない〈彼岸〉の彼方へと、つまり〈岸〉という「境界性」を越えてしまったものなのである。

これは、前年の明治44年11月29日夕刻に漱石の五女ひな子の急逝した事件（突然死）をそのまま「彼岸過迄」の四章「雨の降る日」として「報告」と「須永の話」の間に配置されていることになるわけだが、前述した漱石自身による緒言「彼岸過迄に就て」のなかに「かねてから自分は個々の短編を重ねた末に、其の個々の短編が相合して一長篇を構成するやうに仕組んだら、新聞小説として存外面白く読まれはしないだらうかといふ意見を持してゐた。」³³¹と「彼岸過迄」における実験的な創作方法を採用することを予告していたように、その連作的な「短編」を千代子が〈聴き手〉の敬太郎に「告白する」というフレームを採用することで書かれている。

ここで松本恒三の家族構成について、その固有名の羅列を行うことには、ある必要のあつてのことのように思われる。「松本には十三になる女を頭に、男、女、男と互違に順序よく四人の子が揃つてゐた。是等は皆二つ違ひに生れて、何れも世間並に成長しつゝあつた。家庭に華やかな匂を着ける此生き生きした装飾物の外に、松本夫婦は取つて二つになる宵子を、指輪に嵌めた真珠の様に大事に抱いて離さなかつた。彼女は真珠の様に透明な青白い皮膚と、漆の様に濃い大きな眼を有つて、前の年の雛の節句の前の宵に松本夫婦の手に落ちたのである。」³³²と松本家の次世代を形成する家族構成が示されている。「咲子といふ十三になる長女」、「十一になる男の子」、「九つになる重子」、「七つになる嘉吉といふ男の子」というように二年の間隔で整然と子どもを儲けている松本夫妻の家族計画が律儀であるということよりも、これは明治国家の社会構成における政策である戸主を中心とした「家」制度を基盤とする家族法³³³に基づく国民形成の方針の端的に現れたものであり、つまり男子が二人生まれた時点で、世代交代という社会的代謝作用の働きは完成していると見做してよいものである。要するに、家督を継承し戸主となる長男とその交代要員（スベア）としての次男との男子二人体制が構築されるわけだが、もちろん次男は天皇の軍隊における兵士となる宿命を負っていることになる。小山静子氏の指摘するように「戸籍制度は国民観念を生み出しただけでなく、『家』の観念をも、国民一般に浸透させる役割を担っていく。とりわけ、明治六（一八七三）年に出された徴兵令の免役規定では、免役対象者として戸主・嫡子・嫡孫子・養嗣子があがっていたので、人びとは『家』の存在を急速に意識化していくことになった。」³³⁴しかし、徴兵忌避の手段として「家」を利用する弊害が社会問題となったため、明治22年（一八八九）年の改正により戸主免役も撤廃されて、国民皆兵制の完全実施へと移行したことにより、その点での男子の〈家〉における序列化は解消したと考えてよい。そのため、第四子の嘉吉出生の後5年を経て生まれた宵子は、子どものなかにおいて他の四人とはその存在的な意味がまったく異なっていると考えられるのである。

ところで、漱石自身も男子の子どもは二人であり、また作品に関しても、「それから」（誠吾と代助）、「門」（宗助と小六）、「行人」（一郎と二郎）のように長男と次男との関係性が問題となる人物造形を意味のある関係性として作品化している。そのことに関して、石原千秋氏の言うように「明治民法下の〈家〉では、成人であることさえも戸主一人に許された特権だった。その他の家族は戸主に扶養されるべき〈子ども〉＝『無能力者』でしかない。」³³⁵という見方からするなら、「雨の降る日」

の章でそうした子どものあり方とは異なる存在としての宵子（ひな子）の死を描いた漱石における感慨を、松本の言葉を借りて「生きている内は夫程にも思はないが、逝かれてみると一番惜しい様だね。ここに居る連中のうちで誰か代りになれば可いと思ふ位だ」⁽³⁹⁾の言葉が重たく響いてくるように感じられる。

以上

註

- (1) 河原功「佐藤春夫『植民地の旅』をめぐって」(『成蹊国文』第8号、1974年2月)、藤井省三「植民地台湾へのまなざし—佐藤春夫『女誠扇奇譚』をめぐって—」(『日本文学』、1993年1月号)、河野龍也「佐藤春夫『女誠扇奇譚』論—或る〈下婢〉の死まで—」(『日本近代文学』第75集、2006年11月)などの先行論にもとづく。
- (2) 佐藤春夫の「台湾」をめぐる作品を年代順に表にする。

	作品名	発表紙誌	発表年月	ジャンル
1	星	『改造』	大正10年1月 大正10年3月	小説
2	南方紀行	『南方紀行』	大正11年4月刊行	紀行文
	① 廈門の印象	『野依雑誌』	大正10年11月	
	② 章美雪女士之墓	『改造』	大正10年9月	
	③ 集美学校	『新潮』	大正10年9月	
	④ 鷺江の月明	『新潮』	大正10年11月	
	⑤ 漳州	『新潮』	大正10年8月	
	⑥ 朱雨亭の事	『改造』	大正11年2月	
3	蝗の大旅行	『童話』	大正10年9月	童話
4	鷹爪花	『中央公論』	大正12年8月	小品
5	魔鳥	『中央公論』	大正12年10月	小説
6	旅びと	『新潮』	大正13年6月	小説
7	霧社	『改造』	大正14年3月	紀行文
8	女誠扇奇譚	『女性』	大正14年5月	小説
9	奇談 (改題「日章旗の下に」)	『女性』	昭和3年1月	小説
10	植民地の旅	『中央公論』	昭和7年9・10月	紀行文
11	かの一夏の記	『木香通信』	昭和11年8月	随筆

- (3) 下村宏総務長官時代は、台湾における植民地戦争にみられるような武断政治による一定の成果の後、それまでの台湾総督府長官にあたる総督には武官として陸海軍の将官を任命しており、その補佐官として民政長官を置いて軍政を敷いていたわけだが、佐藤春夫訪台の前年大正8年に武官総督制を廃止し、別に台湾軍司令官を置き、民政長官を総務長官と改めて台湾統治における文化統合を推進していく「同化政策」への転換が図られていた。台湾領有四半世紀を迎え、さらに文民統制が進められており、下村は大正4年(1915)から10年(1921)まで6年間総務長官の任にあった。

- (4) 河野龍也(前掲論文、104頁)

- (5) 藤井省三（前掲論文、28頁）
- (6) 註（4）に同じ、104頁
- (7) 埴谷雄高「裂け目の発見—文学的小伝」（『埴谷雄高作品集13 回想・思索集』河出書房新社、1987年、9-10頁）
- (8) 川村湊『『植民地』の憂鬱—埴谷雄高と楊逵』（『作文のなかの大日本帝国』岩波書店、2000年2月24日、195-196頁）
- (9) ベネディクト・アンダーソン『想像の共同体 — ナショナリズムの起源と流行』（白石さや・白石隆訳、リプロポート、1987年）
- (10) 大澤真幸「ネーションとエスニシティ」（『岩波講座現代社会学24 民族・国家・エスニシティ』1996年5月、34-35頁）
- (11) 註（10）に同じ、37頁。
- (12) 註（10）に同じ、41頁。こうした大澤氏の見解は、藤原帰一「帝国主義論と戦後世界」（『岩波講座近代日本と植民地1 植民地帝国日本』岩波書店、1992年11月5日、247-249頁）にも同趣旨の言及がみられる。
- (13) 小森陽一「漱石文学と植民地主義」（『國文学』學燈社、2001年1月号、50頁）
- (14) 註（13）に同じ、51頁。
- (15) 押野武志「『浪漫主義』の地平『彼岸過迄』の共同性」（『漱石研究』11号、翰林書房、1998年11月20日、62-63頁）
- (16) 朴 裕河『『インデペンデント』の陥穽 — 漱石における戦争・文明・帝国主義』（『日本近代文学』第58集、1998年5月15日、86頁）
- (17) 中山和子「三四郎」注解」（『漱石全集』第5巻、岩波書店、1994年9月5日、624頁）
- (18) 註（15）に同じ、63頁。
- (19) 註（13）に同じ、57頁。
- (20) 「彼岸過迄」全7章118回の各章の題名と掲載回数（分量）を表にする。

	章 題	回 数
1	風呂の後	12回
2	停留所	36回
3	報告	14回
4	雨の降る日	8回
5	須永の話	35回
6	松本の話	12回
7	結末	1回

合計 118回

「彼岸過迄」の新聞連載回数は118回で、「東京朝日」は3月1日、「大阪朝日」は2月24日にそれぞれ休載された以外は、1月2日から4月29日まで毎日掲載された。その日数をカウントするなら、明治45年（1912）は閏年であること、すなわちオリンピック・イヤーであったことが知られる。近代オリンピック夏季大会は、1896年4月6日から15日まで第1回大会をギリシャのアテネで開催されて始められたわけだが、その16年後の1912年の第5回ストックホルム夏季オリンピック大会（5月5日から7月27日まで）に、日本は陸上競技短距離の三島弥彦とマラソンの金栗四三の選手2名を派遣して初参加を果たしたのであった。この事実は、二人の日本人選手が当該種目における世界標準の記録を

クリアしていることと同時に、日本国がオリンピックのような国際大会に出場できるだけの世界標準に適合するための国民国家として、この時点で到達していたということを示すものでもあり、また日本国民がそうした世界の列強国に比肩する意識を強く抱いていたことの表われとして、「朝日新聞」を始め、各紙の競合する記事においてその点が強調されていることから確かめられるものである。

次に、当該事情を表わしている新聞記事を引用する。

〔国際競技と日本 嘉納高等師範学校長談〕

「我東京高等師範では持久力を養成すると云ふ上から年来同校生徒に對し長距走を奨励して居るが年々新しきレコードを出して居る殊に今回ストックホルムに催さる、オリムピック競技のマラソンレースに参加する金栗の如きは我校創設以来の最優者である▲昨秋羽田に於る二十五哩競争のレコードの如き見事に従來のオリムピックゲームのレコードを破つて居る或は距離測量に誤りがあるかも知れぬと云ふ疑があつたので時の參謀次長福嶋將軍等に依頼して精測し其最短距離を以て各国のレコードと比較して見るも金栗のレコードに及ぶものがない、併し氣候風土其他種々の關係もあり且つ大選手が各國から参加する事であるから却々安心は出來ない、何しろマラソンレースはオリムピック競技中でも一番の呼物であるから若し金栗にして優勝を占めんか實に▲日本全国の名將にして短距離に参加する三嶋君は今日までの成績は未だ世界のレコードを破ると云に至らないが或ひは日本に於いては同君に比肩するものがないため十分の駛走力が出なかつたかも知れぬ若し世界の^大選手と角逐する場合に於ては従來以上の走力を發揮し得て各國選手を後に^遠瞳若たらしめぬとも限らぬ▲勝敗は兎もあれ三嶋、金栗の両選手の如きは日本運動家の代表者として豪も耻しがらぬ適任者であると思ふ」

（「九州日日新聞」明治45年（1912）6月17日付）

- (21) 夏目漱石「彼岸過迄に就て」（『漱石全集』第16巻、岩波書店、1995年4月19日、489頁）
- (22) 柴田勝二「漱石のなかの〈帝国〉「国民作家」と近代日本」（翰林書房、2006年12月12日、275-276頁）
- (23) 註（16）に同じ、93頁。
- (24) 山室信一「空間認識の視覚と空間の生成」（『「帝国」日本の学知 第八巻 空間形成と世界認識』岩波書店、2006年10月24日、6頁）
- (25) 石田雄「『同化』政策と創られた観念としての『日本』（上）」（『思想』岩波書店、1998年、48頁）
- (26) 註（25）に同じ、48頁。
- (27) 註（25）に同じ、48-49頁。
- (28) 「彼岸過迄」（『漱石全集』第7巻、岩波書店、1994年6月9日、3頁）
- (29) 註（28）に同じ、12頁。
- (30) 註（22）に同じ、166頁。
- (31) 註（28）に同じ、12頁。
- (32) 石原千秋「漱石の記号学」（講談社、1999年4月10日、75頁。）
- (33) 註（28）に同じ、87頁。
- (34) 註（21）に同じ、489頁。
- (35) 註（28）に同じ、184頁。
- (36) 「近代家族」の形成については、明治31年に制定された明治民法に規定されている。
- (37) 小山静子「家族の近代—明治初期における家族の変容—」（西川長夫・松宮秀治 編著『幕末・明治期の国民国家形成と文化変容』新曜社、1995年3月31日、173頁）
- (38) 註（32）に同じ、63頁。
- (39) 註（28）に同じ、203頁。

NATSUME SOSEKI and the relation between his novels and colonialism
— Focusing on his novel “HIGANSUGIMADE” —

OHTSUBO Toshihiko

It is well-known that Japanese modern literature is influenced by colonialism in our old time as the empire of Japan, we often know which many writers in those days, for example, SATHO HARUO's works on Taiwan, tend to such a colonialism remarkably.

Then we have a perspective that SOSEKI's novels were as good as all of them. This study is an attempt which there were numbers of literary writings in Japan, the latter nation state, and how they had a great influence upon any Japanese text, as both nation formation and state formation make progress. This is an essay which I studied the relation between his novels and colonialism, focusing on “HIGANSUGIMADE” as one of the latter trilogy through SOSEKI's literature.